

現代文問題集 第八冊

読み方を選び、文章全体を捉える

発展・総合読解

和会塾

この本の使い方

この本では、単独の評論、物語、二つの文章の比較、資料の照合などに取り組みます。問題と文章に応じて、どこを読み返し、どの根拠を結ぶかを選びながら、文章全体を捉えています。

まず本文や資料を読み、設問が何を、どの範囲まで尋ねているかを確認しましょう。記述問題には昇目の解答欄とメモ欄があります。メモは必要なときに使えます。ノートに書いて取り組んでも構いません。

各章は、本文・設問・解答欄、解答・解説の順です。記述には模範解答と二つの別解例があります。語句が一致するかよりも、根拠と説明のつながり、条件や留保の扱い方を比べてください。異なる筋道の答案がともに十分な答えになることもあります。

関心のある章から始めても構いません。前の冊子をすべて終えていることは条件ではありません。文章や登場人物への賛同、自分の経験を語ることも求めません。本文から言えることと、まだ分からないことを分けて考えてください。

句読点や括弧などの記号も一字と数えます。段落番号は本文へ戻る目印です。資料のある章では本文と資料の両方を確かめましょう。

目次

第一章	待つとは何か	4頁	／	解答・解説	10頁
第二章	似ているということ	13頁	／	解答・解説	19頁
第三章	箱の底	23頁	／	解答・解説	29頁
第四章	上達とは何か	33頁	／	解答・解説	39頁
第五章	街の保存と更新	42頁	／	解答・解説	49頁
第六章	約束の場所	53頁	／	解答・解説	59頁
第七章	うまい説明と正しい説明	63頁	／	解答・解説	69頁
第八章	残るものと消えるもの	73頁	／	解答・解説	80頁
あとがき・奥付		84頁			

各章は、本文・資料・設問・解答欄、解答・解説の順に進みます。

第一章 待つとは何か

この章で身につける力 主張を支える具体例と留保を結び、文章がどこまで述べているかを確認めま
す。

① 「少し待って」と言われると、次に動く時刻を自分では決められない。返事や順番を待つあいだ、何も進んでいないように感じることもある。待つことを、ほかの人や出来事に時間を預ける受け身の状態と考えるのは、無理のない見方だ。

② けれども、動かない時間の中で何が起きているかは、一つではない。話の途中で相手が言葉を探している。こちらには、続きを推し量って言うことも、別の話題へ移ることもできる。そのまま耳を傾けるなら、相手が自分の言葉で話し始める余地を残せる。口を挟まないのは、何もできないからではない。

③ ただ、黙ってさえいれば相手を尊重したことになるわけでもない。相手の顔を見て「まだか」と繰り返し返せば、沈黙は答えを急がせる時間になる。相手が疲れているようなら、いま話すか、別のときにするかを尋ねることもできる。待つ人は、自分が言わずにいることだけでなく、相手がその時間をどう過ごしているかにも目を向ける必要がある。

④ 別の場面を考えてみよう。午後の集まりを準備する人が、使う部屋の返事を待っている。返事が来れば案内を確定できるが、参加者へ昼までに場所を知らせる約束もある。ここでの待ちは、相手の言葉が整うのを見守る時間とは違う。

⑤ 準備する人は、返事のないあいだにも、別の部屋が使えるか調べておける。昼になっても返事がなければ、いま分かっていることを参加者へ伝え、場所を仮に決めることもできるだろう。「もう少し待つ」とだけ言って案内を延ばせば、待っていた本人の判断の負担を、参加者へ移すことになる。

⑥ 二つの場面では、待つ時間に守ろうとするものが異なる。話の途中では相手が言葉を選ぶ余地を、集まりの準備では確かな案内をする機会を守ろうとしている。しかし、前者でも沈黙が相手への圧力になれば、後者でも連絡の約束に間に合わなければ、同じ待ち方を続ける理由は弱くなる。

⑦ 待つか決めるかを、反対の態度として並べる必要はない。どの返事がまだ必要かを見定め、返事がなくても進められる準備をする。そのうえで、いつまで保留できるかを考える。こうした判断は、待ち終わってから突然始まるのではなく、待っているあいだにも行われている。

⑧ 時間がたてば、求める答えが必ず来るわけではない。相手の事情を想像して待つことはできても、その想像だけで沈黙の理由を決めることはできない。反対に、返事がないことをすぐ拒絶と受け取れば、確かめられたはずのことまで見失う。待つ時間には、分からないままにしておくべきこともある。

⑨ だからといって、分からないことが残るかぎり何も決められないわけではない。集まりの場所なら、あとで変更する可能性を伝えたくて、いったん知らせる方法がある。話の相手には、答えを代わりに決めずに、続きは後で聞けるかと尋ねられる。決める範囲を狭めたり、次に確かめる時を示したりすることは、待つことをやめて相手を切り捨てる行為とは限らない。

⑩ 待つことがただの空白でも、つねに望ましい態度でもないのは、そのためだ。待つ人には、急いで埋めないほうがよい間を見分ける仕事がある。同時に、その間を保つことで誰にどんな負担が生じるかを見て、必要なら自分の側の決め方を変える仕事も残る。

設問

問一

第二段落の「口を挟まないのは、何もできないからではない」の説明として、最も適切なものを一つ選びなさい。

ア 話を補うこともできるが、それを控えて相手が自分の言葉を選ぶ時間を残すから。

イ 言葉を補う前に、相手が次に何を言うか正確に知っておく必要があるから。

ウ 沈黙を長く保てば、相手の考えはより深くまともだと見込めるから。

エ 話を続けるかどうかは相手だけが決めることで、聞く側には何も選べないから。

解答 〔 〕

問二

第五段落の「判断の負担を、参加者へ移すことになる」の説明として、最も適切なものを一つ選びなさい。

ア 会場から返事がないため、参加者全員に場所を選んでもらうことになるから。

イ 別の部屋を調べることで、参加者が希望を伝える機会を失ってしまうから。

ウ 場所が未確定だと知らせることで、参加者の不安を増やしてしまうから。

エ 昼までに知らせる約束を果たさず、参加者が予定を立てる時間を減らすから。

解答 〔 〕

問五

検討する要約 「この文章は、相手を尊重するため、結論を急がず、答えが出るまで待つべきだと述べている。」

この要約にはどのような不足がありますか。本文の具体例と留保に触れ、一二〇〜一五〇字で説明しなさい。

解答欄 一一〇～一五〇字

This image shows a full page of blank graph paper. The grid consists of thin, light gray horizontal and vertical lines that intersect to form a series of small, uniform squares across the entire surface. There are no margins, text, or other markings on the paper.メ
モ

必要に応じて、根拠となる箇所や答案の順序を書き留めましょう。

解答・解説

本文の道筋 ①は待つことが受け身に見える理由、②・③は言葉を探す相手を待つ働きとその留保を述べます。④・⑤は連絡に期限のある準備を示し、⑥・⑦で二つの場面を結びます。⑧・⑩では、答えが来ない可能性を残しながら、決められる範囲を見定めます。

問一

正答 ア

根拠と判断 ②では、聞く人には言葉を補うことや話題を変えることもできるが、あえて耳を傾ければ相手が自分の言葉を探す余地が残ると述べます。アは、できる介入を抑える選択を表しています。

他の選択肢 イは相手の発言を正確に予測する必要を付け足しています。ウは沈黙の長さだけで効果を決め、③の留保にも反します。エは聞く側にも待ち方を選ぶ余地があることを落としています。

問二

正答 エ

根拠と判断 ④には参加者へ昼までに場所を知らせる約束があります。⑤の準備する人は別案を調べたり仮に決めたりできるのに、待つだけで連絡を延ばすと、参加者が予定を立てるための情報と時間が減ります。

他の選択肢 アのように参加者へ決定を任せる話ではありません。イは準備する人の代案検討を問題にしますが、本文はむしろそれを認めています。ウは「知らせた」場合を問題にしますが、本文が批判するのは知らせずに延ばす場合です。

問三

設問の条件 聞く人が何をしないかだけでなく、相手がその沈黙をどう受け取るかに触れます。**根拠から答案へ** ③では「まだか」と急かせば沈黙が圧力になり、相手が疲れているなら話す時を尋ね直せると示します。②の「余地を残す」が成り立たない場合を考えます。

模範解答〔五八字〕

同じ沈黙でも、返答をせかす態度は相手への圧力になる。相手がいま話せるかを見て、必要なら別のときにする選択も要るから。

別解例①〔六三字〕

口を挟まなくても、相手に答えを急がせているかもしれない。相手が沈黙をどう過ごしているかを見て、話す時を選び直す必要があるから。

別解例②〔六四字〕

沈黙そのものが尊重を示すわけではなく、待たれる側に負担がかかる場合もある。相手の状態に注意し、続けるか尋ねるか判断すべきだから。

答案で注意したい点

「黙るのは失礼だから話しかける」とは書けません。本文は待つこと自体を否定せず、相手への影響によって同じ沈黙の意味が変わると述べます。

☆自己採点の観点 沈黙の長さや聞く人の善意だけで判断せず、相手への圧力と、待ち方を変える選択を関係づけましたか。

問四

設問の条件 会話と集まりの準備で、何を保留し、待つ間に何を見たり進めたりできるかを示します。

根拠から答案へ

②・③では言葉を補わず耳を傾けつつ、相手に圧力がかからないかを見ます。
④・⑤では部屋の返事を待ちながら別の部屋を調べ、連絡期限を考えます。⑦はそれらを「待ちの内側の判断」としてつなぎます。

模範解答〔九一字〕

会話では相手の言葉を奪わず、沈黙が負担にならないか見ている。集まりの準備では部屋の返事を待ちながら代案を調べ、昼の連絡期限も考える。どちらも保留する範囲と待ち方を選び続けているから。

別解例①〔九二字〕

相手が言葉を探すときは口を挟まない選択をし、その様子を見て話す時を尋ね直せる。部屋の返事を待つ人も別案を探し、いつ知らせるか決める。待つ間にできるとや、保留の限界を見定めているから。

別解例②〔一〇一字〕

話を聞く人は相手の言葉が出る余地を保ちながら圧力にも注意する。一方、準備する人は返事を待つ間に別室を調べ、知らせる期限を守ろうとする。両方とも結果を待つだけでなく、続け方と切り替え方を判断しているから。

答案で注意したい点 「待つことは判断をやめること」と書く⑦と反対になります。ただし二つの場面で同じ時刻まで待つべきだとも述べていません。

☆**自己採点の観点** 相手の言葉待つ場面と会場の返事を待つ場面を挙げ、待つ最中の行為や判断がどう異なるか示しましたか。

問五

設問の条件 要約が拾った肯定面を認めた上で、待つことが必ず尊重にならない場合と、待ち続けられない場合を示します。

根拠から答案へ ②は言葉を探す相手の余地を残す働き、③は沈黙が圧力になる留保です。

④・⑤は昼までに案内する約束と代案、⑧・⑨は答えが来ないままでも決められる範囲があることを示します。

模範解答〔一五〇字〕

言葉を先回りせず待てば、相手が話す余地を残せる点は捉えている。しかし、黙っていても返答を急かせば圧力になり、尊重とは言えない。集まりの準備では返事を待ちつつ代案を調べ、昼に参加者へ知らせねばならない。答えまで一律に保留せず、相手への影響と期限に応じて待ち方や決める範囲を選ぶという条件を落としている。

別解例①〔一四〇字〕

要約は、言葉を探す相手に時間を残す意味を拾うが、全場面に広げている。答えを催促する沈黙なら負担になり、会場の返事を待つ間も連絡を延ばせば参加者が困る。必要なら後で変えられる形で知らせ、話の続きは別の時に尋ねられる。結論を急がないことと、決められることまで先延ばしにすることは違う。

別解例②〔一四八字〕

相手の言葉を奪わず待つことには意味がある。しかし沈黙が圧力になるなら話す時を尋ね直すべきだし、部屋の返事が遅れても連絡の期限を越えてよいとはしない。答えが来る保証もないので、分からないことを残しつつ代案の準備や暫定的な案内ができる。「答えが出るまで待つべきだ」では、こうした条件と判断を落とす。

答案で注意したい点 「待つことはよくない」と逆の一律の結論にしても不十分です。相手の言葉を奪わない利点を残し、圧力や連絡期限がどのように待つ判断を変えるかを説明します。

☆**自己採点の観点** 肯定面と少なくとも二種類の留保を示し、「答えが出るまで」という要約の範囲がなぜ広すぎるかを一本の説明にしましたか。

第二章 似ているということ

この章で身につける力 比べる観点を明らかにし、共通点から言えることと、まだ確かめる必要があることを分けます。

① 学校の道具室に、大きさも表紙の色もよく似た二冊のノートがある。開けば、どちらにも日付、名前、道具、確認の欄が並ぶ。初めて道具室を手伝う人が、一冊の書き方を見て「もう一冊も同じように書けばよいのだろう」と考えるのは自然なことだ。知っているものとの似かよりは、新しいものに近づく手がかりになる。

② だが、一冊は、貸した道具がいま誰の手元にあるかを知るための記録だった。道具が返されたことを確かめて、確認欄に印をつける。もう一冊は、使い終わった道具の状態を記す点検のノートで、状態を書く欄もあり、確認の印は状態を確かめたことを表す。同じ欄が並んでいても、最後の印が答える問いは違う。

③ 「二冊は似ている」と言うとき、私たちは何について似ていると言っているのだろう。表紙の色か。書き込む項目か。それとも、後で道具の使われ方をたどれるという働きか。似ているという言葉には、比べる場所が省かれていることが多い。その場所を示さないままでは、共通点が見つかったことと、同じ扱いをしてよいことを区別しにくい。

④ 二冊に日付と名前を書く習慣は、共通にしてよさそうだ。誰がいつ道具に関わったかを後から調べるとき、どちらの記録にも役立つ。しかし、点検ノートの印を見て「この道具は返却済みだ」と判断しては困る。貸出ノートの印とは意味が違うからだ。共通の書式を使える部分と、その書式から導ける判断とは、同じ広さではない。

⑤ だからといって、二冊は違うノートだから互いに何も学べない、と考える必要もない。日付を書き忘れた記録は、どちらのノートでも後から確かめにくい。片方で気づいた書き忘れを防ぐ工夫を、もう片方に試すことはできるだろう。似ている点を足場にして試し、違う点にぶつかったところで使い方を直す。比較には、そのような行き来がある。

⑥ ある目的では二冊を「道具の使用をたどる記録」として一緒に扱える。一方、道具が現在どこにあるかを知りたいなら、貸出ノートと点検ノートを分けなくてはならない。分け方が変わるのは、道具そのものが変化したからではない。私たちがどの問いに答えようとしているかによって、注目する共通点と違いが変わるからである。

⑦ 似ていると感じることは、まだ説明できない関係に気づく入口にもなる。「なぜ二冊とも日付があるのか」と問えば、後から出来事をたどるという働きが見えてくるかもしれない。ただし、その発見は次の調査の始まりだ。日付があるというだけで、印の意味や、記録を残す期間まで同じだとは分らない。見つけた共通点に、答えられる範囲を超える仕事をさせないようにしたい。

⑧ 比較するとき、初めからすべての違いを挙げることも、似た形を見てすべて同じと決めることも、あまり助けにならない。何のために比べるのかを定める。そこに関わる共通点を探し、その共通点で支えられない判断がないか確かめる。必要なら、最初には見ていなかった項目にも目を向ける。そうして初めて、似ているという感覚は、分かったつもりで終わるためでなく、さらに見るためのものになる。

⑨ 似ていることは、同じ扱いをする理由になる場合がある。ただし、どの点で似ているかを示し、その点がいま決めたいことに関わる場合に限られる。比べる観点を言葉にすると、役立つ共通点も、まだ確かめていない違いも、見失いにくくなる。

資料 二つの活動の記録

資料 A 放課後の読書会の記録。日時と参加者を書き、「意見が分かれた箇所」と「次に読み返す箇所」を残す。結論が出なかったときも、どのように意見が分かれたかを記す。

資料 B 行事の係会議の記録。日時と参加者を書き、「決まった担当」と「実施日」を残す。決まらなかった件は「未決」と記し、次の会議に回す。

設問

問一

第四段落の「共通の書式を使える部分と、その書式から導ける判断とは、同じ広さではない」の説明として、最も適切なものを一つ選びなさい。

ア 確認印が両方にあれば、名前と日付と照らし、どちらでも現在の道具の所在を確かめられる。

イ 日付と名前は双方に記せても、確認印が返却を示すか点検を示すかはノートごとに異なる。

ウ 確認印の意味が異なるため、誰がいつ道具に関わったかも共通の書式では記録できない。

エ 書式が共通なら、違う目的で書かれていても、印の意味だけ読み替えれば同じ結果が得られる。

解答 〔 〕

問二

第六段落で、二冊のノートの分け方が目的によって変わる理由として、最も適切なものを一つ選びなさい。

ア 必要な情報が同じでも、表紙の色が似ているかによって分類の名を変えるから。

イ 記録した人の考えがそれぞれ異なり、内容を比べても一つの分け方を示せないから。

ウ 共通の欄があれば、使う目的が違っても二冊を同じ分類へ入れるべきだから。

エ 使用の履歴と現在の所在のどちらを確かめるかで、関わる共通点と違いが変わるから。

解答 〔 〕

問四

第七段落の「その発見は次の調査の始まりだ」とはどういうことですか。二冊のノートについて、発見した共通点から考えられることと、それだけでは言えないことに触れ、八〇〇—一〇〇字で説明しなさい。

解答欄 八〇～一一〇字

[illegible]メ
モ

必要に応じて、根拠となる箇所や答案の順序を書き留めましょう。

解答・解説

本文の道筋 ①・②で二冊のノートの似かよりと違いを示し、③・④で観点と判断の範囲を確かめます。⑤～⑦は共通点から何を調べるかを考え、⑧・⑨で目的に応じた比較をまとめます。資料A・Bでは同じ読み方を別の記録に用います。

問一

正答 イ

根拠と判断 ④は、日付と名前の記入は双方で役立つと認めます。しかし②の印は、一方では返却の確認、他方では状態の点検を表します。同じ欄があることから、同じ判断まで引き出せるわけではありません。

他の選択肢 アは点検の印から所在まで読めるとしています。ウは共通に使える日付と名前まで否定します。エは印を読み替えるだけで同じ結果が得られるとしますが、記録が答える問いの違いを落としています。

問二

正答 エ

根拠と判断 ⑥では、使用をたどる目的なら二冊を一緒に扱えますが、現在の所在を調べる目的なら分けます。目的に応じて、共通の日付や名前と、返却を示す印とのどちらが判断に関わるかが変わります。

他の選択肢 アは表紙の色を目的より優先します。イは記録した人の違いを理由にし、⑥が示す目的と記録の働きを見ません。ウは共通の欄だけを基準にし、所在を調べるときに必要な違いを無視します。

問三

設問の条件 表紙や欄の形などの共通点と、確認印が示すことの違いを対比し、「どの点で」を示す必要へ結びます。

根拠から答案へ ①・②は外見や欄の並びが似ても印の役割が違う例です。③は、比較する点を言わなければ共通点の発見から同じ扱いへ飛びやすいと述べます。

模範解答〔六四字〕 二冊は書式が似ていても印の役割が異なるため、外見や欄の形など、どの点を比べているか示さないと同じ扱いができるか判断できないから。

別解例①〔六二字〕 表紙や欄の並びは共通でも、印は一方で返却、他方で点検を示す。何が似ているかを明らかにしないと、共通点の及ぶ範囲を見誤るから。

別解例②〔六五字〕 同じ日付や名前の欄があるという似かよりと、返却を確かめる働きが同じだという判断は別であり、比較する観点を言わねば混同しやすいから。

答案で注意したい点 「似ている点と違う点があるから」だけでは、何を比べているかが消えます。印の意味の違いを入れる場合も、外見まで似ていないと決めつけないようにします。

☆**自己採点の観点** どの点が共通し、どの働きは同じと言えないかを対比して、観点を示す必要を説明しましたか。

問四

設問の条件 共通の日付や名前から立てられる見通しと、既知の印の違いや未確認の保存期間を区別します。

根拠から答案へ ⑤は共通点を生かして工夫を試せると認めます。⑦は、日付があるという発見から使用をたどる働きを考えつつ、印の意味や記録を残す期間まで同じとは決めないと述べます。

模範解答〔一〇六字〕 二冊に日付があることから、どちらも後から道具の使用をたどるためかと考えられる。しかし、それだけで印の意味や記録を残す期間まで同じとは言えない。似かよりを手掛かりに問いを立て、目的や使い方をさらに調べるということ。

別解例①〔一〇六字〕 日付や名前が双方にあると分かれば、使用を後から追えるという共通の働きを予想できる。ただし、返却と点検では確認印の意味が違い、保存期間も未確認である。似ている点を見つけて終えず、その働きと限界を調べ直すということ。

別解例②〔一〇三字〕

一方のノートを手掛かりに、日付や名前を残す理由が見えてくる。しかし、同じ欄があっても、印の役割や記録をいつまで残すかは別の問いになる。共通点は調べた方向を示すが、それだけで調査の結論にはならないということ。

答案で注意したい点 「比べてみる」だけでは、発見から調査への進み方が示せません。また、保存期間が違っていると本文は確定しておらず、まだ分からないこととして扱います。

☆自己採点の観点 発見した共通点から何を予想できるかと、何をまだ確かめるべきかを、理由でつなぎましたか。

問五

設問の条件 共通欄の利点を認めつつ、Aの意見の違いと読み返す箇所、Bの未決事項が四欄では残しにくいことを検討します。

根拠から答案へ ④は共通の書式と判断の範囲を区別します。資料Aは結論がなくても意見と次に読む箇所を残し、Bは決定と期限に加え未決事項も記します。共通欄を使いつつ、活動ごとの欄を残す案を組み立てます。

模範解答〔一三八字〕

日時と参加者は、後から話し合いをたどるために両方でそろえられる。しかし読書会のAは、決まったことより意見の分かれ方や次に読む箇所が大切であり、係会議のBも未決事項を残す。四欄だけにすると、それぞれの記録が答える問いを失う。共通欄は用い、本文欄は活動の目的に応じて分けるべきだ。

別解例①〔一四五字〕

二つの資料が話し合いの日時と参加者を記す点は共通し、その欄をそろえる案は使える。ただ、Aでは結論が出ないときの意見の違いと読み返す箇所が必要で、Bでも担当や実施日以外に未決の件を記す。決定事項と期限だけを残す形では後で確かめたいことが抜けるため、共通部分だけを統一し、内容の欄は別に設ける。

別解例②〔一四五字〕

後で誰がいつ集まったかを確かめるには、A・Bの書式を共通にする利点がある。だが「決まったことと期限」が中心なのはBの一部であり、Bにも未決の件がある。Aで残すべきなのは、異なる意見と次に読む箇所だ。似ているのは話し合いをたどるための欄までと捉え、活動ごとに必要な記録を加える形に直すべきだ。

答案で注意したい点 「Aには決定事項がない」とは断定できません。問われているのは記録の方針です。また「違う記録だから統一できない」とすれば、日時と参加者という共通欄の利点を失います。

☆**自己採点の観点** 共通にできる欄と、それぞれ残す内容を提案の修正に結びましたか。

第三章 箱の底

この章で身につける力 物の扱い、会話、作業の前後を結びつけて、人物の判断がどのように動いたかを読みます。

① 押し入れから出した段ボール箱は、村瀬が覚えていたよりずっと軽かった。母の三回忌を前に、姉の千春と実家の物を整理している。もう二人ともここでは暮らしていない。箱の横には「机まわり・小物」と、大学を出て家を離れるときの村瀬の字が残っていた。持ち上げるには困らない重さなのに、捨てる物を入れる袋の前で、村瀬は箱を床へ下ろした。

② 中にあつたのは、表示の欠けた電卓、キャップの固い万年筆、小さな手帳、それに青い花の絵がついた缶だった。電卓は何度押ししても数字が半分しか出ない。村瀬は万年筆のキャップを回したが、指だけが滑った。前にも一度、開けられなかったことがある。

③ 千春が、押し入れの反対側で紙袋を広げていた。「そっちは終わりそう？」村瀬は「もう少し」と答え、電卓を箱から出した。電卓の下から、薄い紙が一枚出てきた。クリーニング店の預かり票だった。店の名前も受取日も、端からかすれている。裏返しても何も書かれていない。村瀬はそれを捨てる袋に入れ、電卓は箱へ戻した。

④ 千春は横から手帳をのぞいた。「それ、母さんが使ってたやつだね」村瀬が開くと、醤油、切手、乾電池と並んだ買い物メモの端に、別の細い字で「電話する」とだけ書かれていた。誰に電話するつもりだったのか、分からない。「私、こういうメモ、何冊か持って帰ったよ」と千春が言う。「これもそっちにまとめる？」「いや、ちょっと見てから」村瀬は同じページをもう一度開いた。

⑤ 千春は万年筆を手にとった。「これは、あなたの？」「高校のときに使ってた」千春はキャップを試してから、机の上に戻した。「今は使わないでしょう」「うん」村瀬はそこで言葉を切った。手帳は箱に開いたまま、万年筆は箱の外にある。村瀬はどちらにも手を伸ばさなかった。

⑥ 「こっちは？」と千春が、青い缶を指した。中には短いねじが三本入っている。村瀬は缶を振り、乾いた音を聞いた。「何のねじだろう」「さあ。家具を動かして足りなくなったら困るし、缶ごと置いてどうか」千春は缶を押し入れの手前へ寄せた。机の上には万年筆が置かれたままだった。

⑦ やかんが鳴り、千春は「お茶いれるね」と部屋を出た。村瀬は電卓を取り出し、電源の入る方の角を押した。数字はやはり欠ける。捨てる袋の口を開きかけて、電卓を脇に置いた。万年筆も、もう一度回した。キャップは動かなかった。

⑧ 戻ってきた千春は湯のみを二つ畳に置き、押し入れの手前にある缶を見た。「そのねじ、ここの家具のかな。分からないなら、あとで押し入れを開けたとき見つかるようにしておこう」村瀬は箱の側面に残る「机まわり・小物」の字を見た。何の部品かは、やはり分らない。「そうだね」村瀬は缶を開けて中を確かめ、ふたを閉めた。

⑨ 「持って帰る物には、こっちの袋を使って」と千春が言った。自分の前に置いた紙袋とは別に、小さな袋を一つ差し出す。「急いで決めなくてもいいけど、ここに置く物と持って帰る物、あとで分かるようにしないと」村瀬は袋を受け取り、机の上の万年筆を見た。

⑩ 万年筆を袋へ入れた。続けて電卓を手にとったが、元の箱へ戻す。箱には手帳と電卓が並んでいた。村瀬は手帳を閉じたが、千春に渡すことも、自分の袋に入れることもしなかった。青い缶は押し入れの手前に置いたままだ。箱のふたをかぶせず、村瀬は立ち上がった。

⑪ 玄関に置いた袋は、押し入れから出した箱よりさらに軽い。万年筆の細い重みは、袋の底の端に寄っていた。千春があとから湯のみを持ってきて、「車に積む？」と聞いた。「うん、これは」村瀬が袋を持ち上げると、千春は押し入れの方をちらりと見た。「あとの物は、帰るまでもう一回見ようか」村瀬はうなずいた。玄関からは、ふたの開いた箱の中までは見えなかった。

本文は本教材のための創作です。

設問

問一

預かり票、電卓、万年筆の扱いとして、この文章に合うものを一つ選びなさい。

ア 預かり票を捨て、電卓は箱へ戻し、万年筆も最後には箱へ戻す。使えない物はすべて後で分けて直すことにした。

イ 預かり票は捨て、電卓を箱へ戻し、万年筆を袋へ入れる。村瀬は使える物を持ち帰る基準で分けている。

ウ 預かり票は捨て、電卓は箱に戻し、万年筆は持ち帰る袋に入れる。同じ箱の物でも扱いを一度に決めていない。

エ 預かり票は捨て、電卓を持ち帰る袋へ入れ、万年筆は箱へ戻す。残りの物はまだ決めていない。

解答 〔 〕

問二

第四段落の千春と村瀬のやり取りについて、最も適切なものを一つ選びなさい。

ア 千春は手帳も自分が持ち帰ることを提案するが、村瀬が見てから決めたいと言うと、その場では引き取らずにいる。

イ 千春は母のメモを何冊か持っているので、この手帳も当然自分が持つと考え、村瀬に一度見せてから引き取る。

ウ 千春は手帳が母の使っていた物か確信がなく、村瀬に確かめてもらうため自分が持つ案を出している。

エ 千春は手帳を村瀬に持ち帰らせようとしているが、村瀬は家に置きたいので「見てから」と返している。

解答 〔 〕

解答・解説

本文の道筋 ①～③で、箱の中身と村瀬の最初の扱いが示されます。④～⑥では、手帳・万年筆・ねじの缶について姉弟の言葉と対応が異なります。⑦～⑧で同じ物を確かめ直し、⑨～⑪では持ち帰り用の袋を前にして、一部の行き先だけが決まります。

問一

正答 ウ

根拠と判断 第三段落で預かり票を捨てる袋に入れ、電卓を箱へ戻します。第十段落では万年筆を持ち帰り用の袋に入れ、電卓は再び元の箱へ戻します。三つの行き先をたどったウが適切です。

他の選択肢 アは最後に万年筆を箱へ戻したとする点が違います。イは三つの行き先は合っていますが、万年筆は開けられず、使える物を選んだわけではありません。エは電卓と万年筆の行き先を逆になっています。

問二

正答 ア

根拠と判断 千春の「これもそちにまとめる？」は、自分が持ち帰る案です。村瀬は「ちょっと見てから」と答え、千春に手帳を渡していません。その場で引き取らずにいるアが適切です。

他の選択肢 イは村瀬の返事後、千春が受け取ったことにしています。ウは千春が母の手帳と述べた点に反します。エは持ち帰る側を逆にし、村瀬が置くことと決めたとも書けません。

問三

設問の条件 万年筆は今使わず開けられないが、高校時代に自分が使った物でもあります。「使わない」という返事を、処分する結論と同じにしないことが必要です。

根拠から答案へ 第二段落のキャップを開けられない事実、第五段落の自分が使っていた記憶、「うん」の後の沈黙と手が止まる描写を結びます。千春が処分を命じたと書く根拠はありません。

模範解答〔七十二字〕 今は使わずキャップも開かないが、高校時代に自分が使った物なので、使えないことだけで捨てるとは決められず、その理由もうまく言葉にできなかったから。

別解例①〔六九字〕 万年筆を使わないのは事実でも、自分が長く持っていた物をどうするかは別の問題である。村瀬は千春への返事だけでは結論を出せず、手を止めたから。

別解例②〔六七字〕 「使わない」と答えたのは現在の用途についてだけである。高校時代に自分が使った万年筆を手放すかどうかまでは答えられず、触れずにいたから。

答案で注意したい点 「千春に叱られて言い返せなかった」とは書けません。また、村瀬が万年筆を使えるように直すと決めたわけでもありません。使えない事実と、その先の判断を分けます。

☆**自己採点の観点** 使わないという事実を示したうえで、それだけでは処分の判断に至らない理由を、村瀬が使ってきた物という本文の根拠につなげていますか。

問四

設問の条件 千春が万年筆の処分を決めたか、ねじの用途を確定したかを取り違えないでください。二つに対する対応と、その違いを生む事情を説明します。

根拠から答案へ 第五段落で千春は所有と現在の使用を尋ねますが、万年筆を捨てるとは言いません。第六・八段落では、ねじが後で必要になる可能性と、次に探すときの位置が話題になります。

模範解答〔一〇〇字〕 万年筆は村瀬が使っていた物なので、千春は今使うかを確かめても、残すかどうかを代わりに決めない。一方、ねじは用途が不明でも後で家具に必要なかもしれない、そのとき探せるよう、缶を押し入れの手前に置いた。

別解例①〔一〇〇字〕 千春は万年筆について、村瀬の物か、今も使うかを尋ねるだけで、本人に判断を残す。ねじについては、何の部品か分からないからこそ、家具を動かすときに不足する可能性を考え、次に見つけやすい場所へ缶ごと寄せた。

別解例②（九七字）

万年筆は使わないと聞いても、村瀬自身の物なので千春は処分を指示しない。ねじは二人とも用途が分からないが、将来の作業に関わるかもしれない。そのため捨てず、必要になったときに確かめやすい位置に置く。

答案で注意したい点

「使えない物はすべて捨てる人」では、ねじを残した行動と合いません。「用途不明なら何でも残す」も言い過ぎです。ねじがどの家具の物かは未確定です。

☆自己採点の観点 万年筆への問いかけと、缶を残して置き場所を変えた行動の両方を説明していますか。それぞれの事情から扱いの違いを導いていますか。

問五

設問の条件 二つの「軽さ」は物理的な重さだけでは説明できません。箱をまとめて分けようとした場面と、持ち帰る物を選んだ場面を比べ、未決定の物が残ることも示します。

根拠から答案へ 第一段落で箱全体を捨てる袋の前へ下ろします。第九段落で千春が持ち帰りの袋を渡し、第十・十一段落で万年筆だけは持ち帰ると決めます。手帳・電卓・缶はまだ処分しません。

模範解答（一五〇字）

初めは箱の中の物をまとめて捨てるか残すか決めようとして、軽くても手が止まった。千春が持ち帰り用の袋を渡したことで、村瀬は万年筆を自分の所へ運ぶことだけなら決められた。母の手帳や電卓は箱に残り、ねじの缶も手前に置いたままで、整理は終わっていない。決められることが一つ具体化したため、袋を運べたのである。

別解例①（一五四字）

冒頭の箱は、少ない中身を一度に処分するかどうかという判断を村瀬に迫る。千春が「ここに置く物と持って帰る物」を区別する袋を渡すと、使えない万年筆でも自分の部屋へ持つと決められた。ただし母の手帳を誰が持つかは決まらず、電卓やねじの扱いも残る。袋の軽さより、決める範囲が狭まったことが、玄関へ運ぶ動作を可能にした。

別解例②（一五〇字）

初め村瀬は箱の物をまとめて分けようとし、軽い箱を捨てる方へ動かせなかった。千春が別の袋を用意すると、万年筆を捨てずに持ち帰るという一つの行き先を選ぶ。手帳はまだ箱にあり、ねじの缶は押し入れの手前、電卓も未処分である。物の重さが変わったからではなく、一部だけ行き先を決め、残りをまた見られるから運べた。

答案で注意したい点 手帳が箱に残るので、整理が終わったとは書けません。万年筆を捨てる決心や修理をしたとも言えません。千春が袋を渡すことと、村瀬が持ち帰る物を選ぶことも区別します。

☆**自己採点の観点** 冒頭と終盤の行動を比べ、千春の袋が選択肢を変えたこと、万年筆について決めたこと、未決定の物が残ることを、一つの説明の筋で結んでいますか。

第四章 上達とは何か

この章で身につける力 二つの文章の共通の前提と重点の違いを読み、一方の指摘が他方への反論になるか確かめます。

文章A

① 短い案内文を声に出して読む。初めは言葉の途中で息が切れていた人が、教わった区切りに沿って最後まで読めるようになったなら、それは上達だろう。ただ、止まらずに読めたという一度の結果だけでは、その人に何が見えるようになったかまでは分からない。

② 教わった区切りは、読み方の一つの型である。まだ自分の声を確かめる手がかりの少ない人にとって、同じ型へ戻ることは窮屈にも思える。しかし、区切りをそのつど変えていれば、どの息の使い方がどんな聞こえ方につながったのか、比べる位置が定まらない。型は、動きをそろえるだけでなく、動きの差を見るための基準にもなる。

③ 何度か同じ所を読んでみる。前より楽に言えたつもりでも、録音を聞くと語尾が急いでいることがある。逆に、少し遅くなったただけだと思った回には、大切な語が聞き取りやすくなっているかもしれない。読むたびに確かめ、次に同じ区切りへ戻ると、できたかどうかという二つの答えの間に、多くの違いが見えてくる。

④ 反復は、決められた読みを何回できたか数える作業ではない。同じ区切りを手がかりに、毎回違う声を聴き分ける。回数だけが増え、違いを確かめられないなら、型はただ守る約束になってしまう。

⑤ 教わった区切りが、どんな文章や聞き手にも合うとは限らない。それでも型へ戻った経験は、読みを変えたあとで、何が違い、何をもたらしたかを考える手がかりになる。

文章B

⑥ 決められた区切りで案内文を読めるようになった人が、広い部屋で、離れた席にいる人へ同じ案内をしよう。いつもの読みを繰り返しても、集合時刻が聞き取りにくいと言われた。以前できた読み方を正しく再現するだけでは、この場の目的を果たせない。

⑦ そこで、時刻の前に短い間を置いて読む。時刻は聞こえやすくなるかもしれないが、その前後の言葉のつながりは弱くなるかもしれない。間を置く場所や長さを少しずつ変え、聞き手が案内全体を取り違えないか確かめる。変えたという事実だけで、よい読みになったとは言えない。

⑧ 型を少しずらす試みには、このように、その型が何を支えていたかを見つける働きがある。変えても保てる部分と、変えると失われる部分がある。もとの区切りへ戻したほうがよいこともある。ずらすのは、いつも新しい読みを選ぶためではなく、今の目的に照らして読み方を確かめるためである。

⑨ もっとも、初めから思いつくままに区切りを変えていては、何と何を比べたのが曖昧になる。試しに変えた箇所と、もとの読み方を行き来できてこそ、違いの意味が見えてくる。一方で、決められた区切りを守った回数を増やすだけで練習を終えるなら、聞き手や場面が変わったときの判断にはつながりにくい。

⑩ 型を使えるとは、形を忘れることではない。教わった読み方を出発点に、必要なら一部を変え、その結果から残すか戻すかを選ぶ。何を伝えるための読みかという問いは、どちらの段階にも残る。

文章A・Bは本教材のための創作です。

設問

問一

文章Aで、同じ型に戻って読むことが大切だとされる理由として、最も適切なものを一つ選びなさい。

ア 区切りを一定にすると読みの速さがそろい、毎回同じ結果を得られるようになるため。

イ 同じ区切りを基準にすることで、自分の声に生じる小さな違いを比べられるため。

ウ 違いに気づけなくても、決められた読みをできた回数が増えることを示すため。

エ 最初から区切りを毎回変える練習へ移るために、まず同じ型を覚える必要があるため。

解答 〔 〕

問二

文章Bの「型を少しずつ試み」の説明として、最も適切なものを一つ選びなさい。

ア 型どおりに一度読めたら、あとは元の区切りを比べず、好みに合う読みを探すこと。

イ 変更によって聞こえ方が変わっても、もとの型へ戻れることは失敗と考えること。

ウ 区切りの一部を変えて影響を比べ、伝える目的に応じて残すか戻すか選ぶこと。

エ 一語が聞き取りやすくなれば、案内のほかの部分への影響は問わず採用すること。

解答 〔 〕

問三

文章A・Bに共通して、型が必要とされるのはなぜですか。両文章を踏まえ、六〇〜九〇字で

解答欄 六〇～九〇字

[illegible]メ
モ

必要に応じて、根拠となる箇所や答案の順序を書き留めましょう。

解答・解説

二文章の道筋 文章A①～⑤は、型に戻る反復を、声の小さな違いを聴き分ける営みとして述べます。文章B⑥～⑩は、型を一部変えた結果を目的に照らして比べ、残すか戻すか選ぶ過程を述べます。両者は、回数だけ・変更だけを上達とはしません。

問一

正答 イ

根拠と判断 文章Aの②では、型が動きの差を見るための基準になると述べます。③・④では同じ区切りへ戻り、毎回の声のずれや聞こえ方を確かめます。イがその関係を表します。

他の選択肢 アは同じ結果を得ることを目的にしていますが、Aは毎回の違いに着目します。ウは回数だけを数える練習をA自身が退ける点に反します。エは初めから区切りを変え続けるという、Aが避ける練習です。

問二

正答 ウ

根拠と判断 文章Bの⑦・⑧では、間の置き方を変えて効果と失われるものを確かめ、必要なら元へ戻ると述べています。⑩の目的に照らす判断まで含むウが適切です。

他の選択肢 アは元の型との比較を外し、⑨に反します。イは⑧・⑩にある「戻す」選択を失敗としています。エは⑦で示された、時刻以外の言葉のつながりへの影響を落としています。

問三

設問の条件 Aだけの反復、Bだけの変更を別々に紹介するのではなく、どちらでも型が比較の手がかりになることを説明します。

根拠から答案へ A②～④では同じ区切りへ戻って声の差を確かめます。B⑧・⑨では型と変更後の読みを行き来して、何が保たれ失われたかを確かめます。

模範解答 (六五字)

同じ型があると、反復するたびに生じる小さな違いを比べられる。型をずらすときにも、何を変え、何が保たれたかを確かめる基準になるから。

別解例①〔七〇字〕

教わった読み方を基準にすれば、同じ練習の中のずれに気づける。変える場合も元の読みと比べて効果を確かめられ、思いっぴきだけの変更にならないから。

別解例②〔六六字〕

初めは自分の声の変化を測る位置が要り、読みを変える段階でも戻る位置が要る。型は反復の結果と変更の働きを見分けるための支えになるから。

答案で注意したい点

「Aは型を守り、Bは型を捨てる」と書くとき共通の前提が失われます。型を学ばずすべての場面で同じ読みをすべきだとも述べていません。

☆自己採点の観点 Aの反復とBの変更の両方において、型が何を比較する位置になるか、一本の筋として説明していますか。

問四

設問の条件 Bの指摘が何を対象にするかを見極め、Aが実際に述べる反復と比べます。そのうえで、Bが加える視点を説明します。

根拠から答案へ

A④は回数だけを数える反復を退け、⑤は区切りを変える場合も認めます。

B⑨は回数だけで終える練習を批判し、⑦・⑩で変更後の聞こえ方を確かめることを重視します。

模範解答〔一〇三字〕

否定しない。Bが問題にするのは型を守れた回数だけで練習を終えることで、Aも回数ではなく同じ区切りに戻って声の差を聴き分けることを反復とする。Bはその基準を使い、変更の効果まで吟味する過程を詳しく示している。

別解例①〔一〇一字〕

Bの指摘は、Aのいう反復そのものへの反論ではない。Aも違いを確かめない繰り返しを退け、必要なら型を変える余地を認める。Bは、身につけた型を少しずらし、聞き手への伝わり方で選び直す過程を詳しく述べている。

別解例②〔九九字〕

型どおりに読んだ回数を上達の基準にするならBの批判が当たるが、Aはそう述べていない。Aの反復は同じ型の下で差を感じ取る営みであり、変更後の結果を比べる土台にもなる。Bはその土台の使い方を補っている。

答案で注意したい点

Aを「型を決して変えるな」という立場にすると⑤に反します。またBも、反復や型の必要を否定していません。「反論にならない」だけで終えず、Bが何を加えるか示します。

☆自己採点の観点 Bが批判する「回数だけ」の練習と、Aが述べる差を聴き分ける反復を区別し、Bによる補足まで筋を通して説明していますか。

問五

設問の条件 底の改善と、口から取り出しにくくなった点を両方扱います。Aから見える前進と、Bから見てまだ確かめるべきことを区別します。

根拠から答案へ A③・④は、同じ型を繰り返して小さな差に気づくことに当たります。B

⑦・⑧・⑩は、変更が何を助け何を損ねたかを、紙袋の用途に照らして比べる考え方に当たります。

模範解答〔一四四字〕

同じ型で繰り返して底の一角が開くと気づいたことには、Aのいう差を見分ける上達がある。折る順を一箇所変え、その影響を確かめた点もBに合う。しかし紙袋は小物を出し入れするための物で、口が狭くなった以上、底が閉じただけでは十分とは言えない。元の型と比べ直し、両方の働きを保てるか試す必要がある。

別解例①〔一四七字〕

Aから見れば、同じ折り方を重ねて底の開きやすさを捉えたことが前進である。Bから見ても、型をずらして結果を確かめたことは意味がある。ただし底の改善と引き換えに口が狭くなり、出し入れという目的は損なわれた。型を変えた事実を上達の証拠にせず、元の方法へ戻る場合も含めて影響を比べ、次の手を選ぶべきだ。

別解例②〔一四五字〕

底の弱さに気づけたのは、同じ型へ戻って違いを見るAの反復による。折る順を変えた試みはBのいう型の働きの確認にもなるが、底と口の両方が袋の用途に関わる。一部分の改善だけをもって上達したと決めるのは早い。何を変えたために口が狭くなったかを元の袋と比べ、必要な折り方を戻す判断まで含めて考える。

答案で注意したい点 折り紙の知識を使って、正しい折り順を考案する問題ではありません。

「底が閉じた＝完成」も「口が狭い＝すべて失敗」も、本文の二つの見方を落とします。

☆自己採点の観点 同じ型で気づいたこと、変更によって改善したことと損ねたこと、袋の目的を一つの判断につなげていますか。

第五章 街の保存と更新

この章で身につける力 複数の立場と案を、共通の条件で比べます。確認できたことと、判断を変えうる未確認のことも区別します。

① 古い軒が続く通りでは、一軒ずつの建物より、その並びに目が向く。毎日通る人には、曲がり角の看板が帰り道の目印かもしれない。「街並みを残したい」には、形とともに自分の場所を失いたくない思いがある。

② とはいえ、通りは眺めるためだけにあるのではない。店は品物を運び入れ、住民は用事に向かい、初めて来た人も道を探す。建物を直す作業にも、そこで商いを続ける人の予定や負担が関わる。古い外観を残せたとしても、店に物を届けにくくなったたり、通る人の負担が増えたりすれば、「残せた」という一言では済まない。

③ 困る人と守りたい人が、きれいに二組に分かれるわけでもない。店主が軒の景色を大切にしながら、納品のしやすさを求めることがある。住民も、昔からの道を好みながら、人と荷物が重なる時間には通りにくさを感じるかもしれない。訪れる人の希望が、そのまま暮らす人の希望と重なるとも限らない。一人の中でも、守りたいものは複数ある。

④ そこで「残すために変える」と言えば、問題が片づくように聞こえる。だが、何を残すために、どの部分を、誰の負担で変えるのがまだ空白である。屋根の形を保つ改修と、通路の幅を変える工事とは、街の見え方も使い方も違う。どちらにも残るものと失われるものがあり、変えた後の使い方まで自動的に決まるわけではない。

⑤ 費用は工事の金額だけを指さない。工事中に店へ入りにくくなる日があれば、その間の商いに影響する。納品時刻をずらす案なら、店や届ける人に調整の仕事が生じる。反対に、何も変えずに通りの使いにくさを残せば、それを毎日引き受ける人もいる。どの案にも、計画の欄には見えにくい負担がついて回る。

⑥ 案を比べるには、通りについて確かめたことと、案を実施すれば起こると見込むことも分けたい。「人と台車が重なる時間がある」は観察できても、通路を少し広げれば混み合いが解消するかは、それだけでは分からない。ある催しの日に人が多かったとしても、ふだん同じ数が通るとは言えない。見込みを事実として置くと、利点ばかりか不利益まで見誤る。

⑦ だから、足りない情報があるときに、すべての判断をやめる必要はない。いま分かる違いから、どの案が何を優先するかは言える。一方、費用や関係者が協力できるかによって選び方が変わるなら、そこは確かめる仕事として残す。少しずつ試せる変更と、いったん行えば戻しにくい変更とを同じ確かさで決めないことも大切だ。

⑧ 調べれば全員の望みが一つになるわけではない。軒の連なりと通りやすさのどちらを重く見るかは、同じ資料でも違ううる。選んだ案の利点だけでなく、誰が何を引き受けるかまで言葉にしておきたい。

⑨ 街を残すことと新しく使えるようにすることは、互いを打ち消す二つの目標ではない。しかし、両方を大切にすると唱えるだけでは、目の前の通りは変わらない。何を守り、何を変え、その結果を誰が確かめるのか。答えは一つの標語の中でなく、場所ごとの条件と人々の生活に向き合うところにある。

資料 灯町の南通り

以下は架空の町「灯町」の南通りについて、話し合いに出された記録と二つの案である。

共通する記録 南通りの約三〇メートルには古い軒が続き、その区間は道幅が狭い。駅への近道として住民が通り、二つの店は営業中、一つは空き店舗である。店の納品台車と歩く人が重なる時間がある。昨年の催しの日には歩く人が増えたが、ふだんの人数やすれ違いの回数は記録されていない。

寄せられた声 営業中の一人の店主は「店先と軒の並びを保ちたい」と願い、「納品に使う時間も必要」とも話す。住民からは「見慣れた通りを残したい」「荷物を持つと通りにくいことがある」との声がある。この声が、ほかの店や住民全員の希望を表すわけではない。

甲案 軒の並びと道幅を保ったまま、傷んだ床と屋根を直す。納品が歩行と重ならないよう時刻を調整し、空き店舗を小さな休憩所にする。調整に応じられる店や届ける人の範囲、費用、新しい休憩所の利用者数は調べていない。

乙案 空き店舗と隣の営業中の店の店先を一部後退させ、狭い区間の一部を広げる。床と屋根も直すが、軒の連続した見え方は変わる。工事中は営業中の店の入口を仮に設ける。所有者と店主の同意、費用、広げた後の通り方は調べていない。

設問

問一

第四段落で「『残すために変える』と言えば、問題が片づくように聞こえる」と述べた後、その言葉ではなお足りないと言われるのはなぜですか。最も適切なものを一つ選びなさい。

ア 残すための変更が認められるのは、屋根や床を同じ材料で直せる場合に限られるから。

イ 街の用途が続くなら、残す形の選択は工事を終えた後の使い手に任せられるから。

ウ 何を守り何を変えるか、誰が負担を引き受けるかを示さなければ案を比べられないから。

エ 残すことと変えることを結びつけるには、すべての調査が終わるまで判断を避けるべきだから。

解答 〔 〕

問二

資料の「昨年の催しの日には歩く人が増えた」という記録から判断できることとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

ア 催しの日の増加は確認できるが、普段の通行量や通りを広げた後の効果までは分らない。

イ 催しの日の増加が確認できるので、普段も同程度に歩く人がいると見込んでよい。

ウ 増えたのは外から来た人だから、納品台車との重なりは主に来訪者の動きで説明できる。

エ 人が増えたという記録がある以上、甲の休憩所より乙の通路拡幅を先に選べる。

解答 〔 〕

解答・解説

本文の道筋 ①・②は通りを景色として残す思いと、生活の場として使う条件を並べます。③～⑤は一人の中にも複数の希望があり、変更にも金額以外の負担があると示します。⑥・⑦で観察と見込み、判断できる点と未確認の点を分け、⑧・⑨で条件を示して選ぶ必要をまとめます。資料は、この考え方を甲・乙の二案に当てるためのものです。

問一

正答 ウ

根拠と判断 ④は「何を残すために、どの部分を、誰の負担で変えるのか」が空白だと述べます。⑤は金額以外の負担も挙げます。標語に賛成するだけでは、変更の内容や影響の違いを比べられません。

他の選択肢 アは同じ材料という条件を本文にない形で付け足します。イは何を残すかを決めないまま工事できるとし、④と反対です。エは⑦の、いま分かる違いから判断できる部分もあるという見方を落とします。

問二

正答 ア

根拠と判断 共通する記録が述べるのは昨年の催しの日の増加です。同じ資料は、普段の人数やすれ違いの回数を記録していないとも明示します。⑥に従えば、催しの日の観察だけから普段の状態や工事後の効果へ飛べません。

他の選択肢 イは催しの日を通常の日に広げます。ウは増えた人の内訳を資料にない形で決めます。エは通行量だけで甲・乙の選択まで済ませ、効果の未確認と軒や店への影響を無視します。

問三

設問の条件 甲の時刻調整と乙の工事中の入口について、誰の何の負担かを示し、金額だけでは比べられない理由につなぎます。

根拠から答案へ ⑤は予定の調整と工事中の商いを例に、費用に表れにくい負担を示します。

資料では甲が納品時刻の変更を、乙が営業中の店の仮入口を要します。確定していない影響は言い切りません。

模範解答〔七三字〕

甲では納品時刻の調整が店や届ける人の手間になり、乙では工事中の仮入口が営業に影響しうる。金額に出ない日々の負担も、案の比較に含める必要があるから。

別解例①〔七五字〕

甲は通り幅を残す代わりに納品する人の予定変更を要し、乙は仮入口を使う間、店と客の動きが変わる。工事費だけ見ても、誰が何を引き受けるかは分からないから。

別解例②〔七七字〕

甲の時間調整には店と届ける人の協力が必要で、乙は工事中に営業中の店への入り方が変わる。どちらも金銭以外の負担が生じうるので、費用を金額だけに限れないから。

答案で注意したい点 乙で売上が必ず減るとまでは資料にありません。また「甲も乙も費用がかかる」では、工事金額以外の負担を説明したことになりません。

☆**自己採点の観点** 両案の負担を、それを引き受ける人と結び、まだ確定していない影響は可能性として書きましたか。

問四

設問の条件 同じ店の中にある二つの希望を分け、甲・乙を同じ観点から比べます。見込まれる効果と、すでに示されている変化は区別します。

根拠から答案へ ③は店主も景色と納品の両方を望みうると示します。甲は軒を保つが納品時刻を調整し、乙は狭い区間の一部を広げるが軒の見え方と工事中の入口を変えます。⑤の負担の所在も入れます。

模範解答〔一一六字〕

甲は軒の並びを保てるが、納品時刻の調整に店や届ける人が応じられないか不明だ。乙は道の一部を広げ、台車と歩く人が重なる負担を減らす可能性がある反面、軒の見え方が変わり、工事中は仮の入口となる。店の二つの希望を満たすと確認できる案はない。

別解例①（一二六字）

甲なら店先の連なりを残せる一方、納品に使える時刻が限られるおそれがある。乙は狭い部分を広げるので台車が通りやすくなるかもしれないが、店先を後退させ、工事中の入口も変える。営業する店にとって、景色と荷物の動かしやすさは両方大切で、案ごとに違う負担がある。

別解例②（一一五字）

店が望む軒の景色には甲が応えるが、時間の調整ができなければ納品との重なりは残る。乙は道幅を一部広げる代わりに軒の続きが変わり、仮の入口で営業する期間も生じる。どちらも店の希望の片方を支えつつ、もう片方には未確認の効果や負担を残す。

答案で注意したい点 店を「保存派」と決めつけると、納品に使う時間が必要という声を落とします。乙についても、広げた後の通り方が未調査なので、台車との重なりがなくなるとは言えません。

☆**自己採点の観点** 甲・乙を同じ二つの希望で比べ、各案の利点と負担を、確かさの程度を保って示しましたか。

問五

設問の条件 案の好みを述べるだけでなく、両案で得るものと引き受けるものを比較し、判断を変えうる未確認事項と対応を結びます。保留する答案も、両案を評価します。

根拠から答案へ 甲は軒を保ち時間調整を試す案、乙は一部を広げるが店先の姿と工事中的の入口を変える案です。⑥により、催しの日の増加から普段や工事後の効果は言えません。費用・協力・同意などの未確認事項から、選択に重要なものを絞ります。

模範解答（一六四字）

私は現時点では甲を暫定的に優先する。軒を保ち、納品時刻の調整なら店先を後退させる工事より変更しやすいと考えるからだ。ただし道幅は狭いままで、休憩所に人が集まれば歩行と台車の重なりが増えるおそれもある。乙は一部を広げられるが軒の続きと店の入口に影響する。普段の通行量と時刻調整への協力を確かめ、重なりを減らせなければ乙を検討する。

別解例①〔一六六字〕

私は乙を条件付きで優先する。通りにくさがある区間の一部を広げられるが、通りやすくなる効果はまだ確かめられていない。甲は軒の連なりを残せる一方で幅は変わらず、時刻調整に感じられる人も不明だ。乙では店先の姿と工事中の入口が変わる。所有者と店主の同意や普段のすれ違いを確かめ、同意が得られないか、拡幅で重なりが減らないなら甲を再検討する。

別解例②〔一七七字〕

私は両案の優劣をまだ決めない。甲は軒の連なりを守るが、時刻調整の負担と狭い幅が残る。乙は一部を広げる代わりに店先の姿を変え、仮の入口を要する。催しの日の人数だけでは、普段の通り方も工事の効果も分らない。まず通常の日の歩行と台車の重なり、店主らの調整や工事への意向、費用を調べる。調整できれば甲、難しく拡幅に効果と同意が見込めて費用も見合うなら乙を選ぶ。

答案で注意したい点 どの立場も同じ重みで両案に賛成すると決めてしまうと、資料にある異なる負担が消えます。未確認事項を並べるだけでも足りません。それを確かめた結果、選び方がどう変わるかを示します。

☆**自己採点の観点** 両案を同じ条件で比べ、優先または保留の理由と、判断に効く未確認事項を一筋につなぎましたか。

第六章 約束の場所

この章で身につける力 確かめられる事実と推測を分け、消した文・送った文・返事の順序から、関係の変化を読みます。

① 駅の東口には、細い柱の上に丸い時計が載っている。雨をしのぐ屋根もなく、誰もその時計だけを見に来ない。それでも待ち合わせなら「時計のところで」と言えば通じる。美佳は柱から少し離れて立ち、三時二十一分になった携帯電話の画面を見た。

② 先月、久しぶりに会った浅野と喫茶店を出るとき、「今度は駅の時計のところで」と話した。美佳の記憶では、次の月の土曜日、三時ごろまで決めたはずだ。ただ、どちらがその日を言い出し、浅野が何と答えたかになると、声ははっきりしない。予定表には「浅野 三時 時計台」とあるが、それは帰宅してから美佳が書いたものだ。二人の間で日時を確かめるメッセージもない。

③ 三時二十二分、浅野から届いた。「ごめん、今日って何か約束してた?」。美佳は一度、周囲を見回した。浅野の姿はなかった。

④ 「今日三時に時計台でって、言ったよね」。美佳はそう打って、送信せずに消した。待っていたことを伝えたかったし、忘れられたのなら腹も立つ。だが、自分の記憶が違っていたら、この一文は相手だけを責める。たとえ合っているでも、「言ったよね」と送れば、浅野に返事をする前から忘れた側の席を割り当てる気がした。

⑤ 代わりに「ううん、私が勘違いしたかも」と送った。「私が」は自分で付けた言葉なのに、送ってから目に引かかった。浅野を問い詰めずに済んだ一方、自分がここに来た理由まで取り消したようだった。美佳はまだどちらの記憶も確かめていない。

⑥ 「え、そうだった？ ごめん。もしかして駅？」と返ってきた。「もしかして」は浅野にも約束の記憶が少しあるからだろうか。美佳の返信を読んで、彼女が駅にいるかもしれないと考えただけかもしれない。美佳は「うん。でも大丈夫。買い物ついだから」と送る。今日は何も買うつもりがなかった。待ち合わせのためだけに来たと知られるのが、急に嫌になった。

⑦ 少し間があって、「ほんとごめん。今から行こうか？」。浅野の家からなら、ここまですりゃ四十分ほどかかる。美佳は時計に目をやった。今から来てもらえば会えるが、それで先月の会話の細部が確かめられるわけではない。会って話すほうがよい気もする。けれど、もう四十分待つ気力がなかった。

⑧ それに、浅野が来れば自分は待った人、浅野は遅れた人になる。もし約束が曖昧だったとしても、その日の姿だけははっきり残るだろう。美佳は「今日はいいいよ。また今度」と返した。断ってから、浅野が申し出たことまで退けたようにも感じた。今からは来なくていいが、今日のことを話さなくていい、と言ったつもりはなかった。

⑨ 駅ビルへ入り、菓子売場を一周した。買い物ついでという文に合わせて何か一つ買おうとしたが、決められずに出た。東口の時計のそばには、さっきと違う人が立っている。美佳には、その人が誰かと約束しているのか、たまたま立ち止まったただけなのか分からなかった。

⑩ 帰りの電車で、浅野から「今度ちゃんと決めよう。時計のところで」と届いた。浅野は時計台を覚えていたのだろうか。それとも、さっき駅にいると知ったから、その場所を選んだのだろうか。美佳は画面を見たまま、電車の揺れに肩を預けた。

⑪ 美佳は「うん。次は日にちも時間も決めよう」と返した。「時計のところで」は書き足さなかった。そこへもう行きたくないのかと、自分でも少し考えたが、まだ答えは出なかった。

⑫ 予定表の今日の欄には、自分で書いた「浅野 三時 時計台」が残っている。美佳は消さずに画面を閉じた。次の土曜日の欄は、まだ空白だった。

設問

問一

本文での美佳の予定表と、浅野とのメッセージの関係として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- ア 予定表に日時があるので、浅野の最初の質問は約束を忘れたことの証拠になる。
- イ 後の「時計のところで」は、浅野も先月決めた日時を覚えていたことを示す。
- ウ 予定表は美佳の記録だが、浅野が来ようとしたことで約束の日は確定する。
- エ 予定表は美佳が書いた記録で、浅野の返信も先月の日時の合意を証明しない。

解答 ー ー

問二

「もしかして駅？」という浅野の返信について、直前までに送られた言葉の順序を踏まえた説明として、最も適切なものを一つ選びなさい。

- ア 「買い物ついで」という美佳の説明を聞き、駅ビルにしていると推測した質問である。
- イ 「勘違いしたかも」を受けて駅にいる可能性を尋ねたが、先月の記憶の有無は定まらない。
- ウ 削除された「今日三時に時計台で」を読み、遅刻を認めるために送った質問である。
- エ 「今から行こうか」を断られた後で、待ち合わせ場所を確かめ直した質問である。

解答 ー ー

解答・解説

本文の道筋 ①・②で時計台に立つ美佳の記憶と一人で書いた予定を示し、③～⑤で消した断定と送った控えめな文の違いを描きます。⑥～⑧では浅野の質問と申し出を受け、会うか断るかを美佳が考えます。⑨～⑫では次の待ち合わせをめぐる返答を残します。今日の約束の有無は決まらない一方、次は日時を確かめようという言葉が二人の間に現れます。

問一

正答 エ

根拠と判断 ②の予定表は美佳が帰宅後に記したもので、二人で確認した記録ではありません。⑩の『時計のところで』は未来の提案とも読め、⑦の申し出も当日の連絡への応答です。先月の合意があったかはなお不明です。

他の選択肢 アは一人の予定を相手の記憶の証拠にします。イは後の言葉から先月の日時までさかのぼります。ウは現在の申し出と過去の合意を混同します。

問二

正答 イ

根拠と判断 ④の断定する文は送られておらず、⑤の『勘違いしたかも』への返事が⑥の『もしかして駄？』です。その問いだけでは、先月の会話を思い出したのか、いま相手の居場所を推測したのか決まりません。

他の選択肢 アの『買い物ついで』は質問の後です。ウは削除された文を浅野が読んだことにします。エの申し出と断りも質問より後です。時系列を逆にすると、浅野の根拠まで取り違えます。

問三

設問の条件 消した断定文と実際に送った文の違いを示し、相手を責めないことと自分に引き寄せた責任との両面をつなぎます。

根拠から答案へ ④では『言ったよね』を消して断定と非難を避けます。⑤では『私が』を送ったため、確認していないのに自分の思い違いのように聞こえ、待っていた理由まで弱めたと感じます。

模範解答〔七四字〕

「言ったよね」を消して浅野を責めることは避けたが、「私が」と送ると、まだ確かめていない約束の食い違いを自分の勘違いとして引き受けたように感じたから。

別解例①〔七一字〕

消した文は浅野が忘れたと決めつけかねず、送った文は逆に自分の記憶を弱める。約束の有無が不明なまま、待った自分の理由まで消す言い方に思えたから。

別解例②〔七七字〕

浅野に「言ったよね」と迫るのをやめた一方、「私が勘違い」と書けば、来た理由を自分で軽くする。どちらの記憶も確かめていないので、その言い方が気になったから。

答案で注意したい点 『私が』を付けたのは優しさだけ、とまとめると後悔を落とします。逆に、自分の誤りを認めたと断定するのも、約束が未確認である点を失います。

☆自己採点の観点 消した文が避けた断定と、送った文が生んだ別の偏りを、未確認の約束に結びつけて説明しましたか。

問四

設問の条件 四十分待つ負担、会えば役割が固定されそうな不安、申し出を退けた後の気がかりを、同じ行動に重なる理由として述べます。

根拠から答案へ ⑦では会って話す可能性も考えますが、もう待つ気力がありません。⑧では約束の有無が不確かなのに待った人と遅れた人の形だけが残るのを恐れ、断った後には相手の申し出まで退けたように感じています。

模範解答〔一〇五字〕

美佳は会って話すことも考えたが、さらに四十分待つ気力がなかった。また、約束の有無が曖昧なまま自分が待った人、浅野が遅れた人という形だけが残るのを避けたい。しかし断ることで、浅野の申し出まで退けたようにも感じた。

別解例①〔一一三字〕

今から会えば先月の会話を確かめられるかもしれないが、美佳は待ち疲れていた。来てもらえば約束の有無より遅れた側と待った側の姿が先に決まるとも感じる。そこで今日は断りつつ、今日のことまで話さずに済ませたいわけではないと気にかけた。

別解例②（一一七字）

四十分後に会う余地はあっても、美佳にはそれ以上待つ力が残っていない。浅野が来た結果だけで二人の役割が決まることも不自然に思い、申し出を断った。ただ、その返事が会う提案だけでなく、今日の話をする機会まで閉じたように聞こえるのを気にした。

答案で注意したい点

『美佳は関係を壊したくないから断った』だけでは、疲れと役割への違和感が消えます。逆に『浅野に会いたくない』と固定すると、⑦の会って話したい気持ちや⑧の後悔に合いません。

☆自己採点の観点 自分の負担と事実の未確定を別々に押さえ、断った後の気がかりまで、本文の順序に沿ってつなぎましたか。

問五

設問の条件 浅野の次の待ち合わせの提案、美佳の日付・時刻を決めるという返答、場所を書き足さなかったことを関係づけます。過去の約束と今後の確約を混同せず、結末の読みを根拠の強さとともに示します。

根拠から答案へ ⑩の『時計のところで』は、過去を覚えていた証拠とは限りません。⑪で美佳は日時を確かめることを求めますが、時計台を繰り返さず、⑫の次の土曜日も空白です。再会に向かう読みと、距離を慎重に保つ読みが可能です。前者は返答に、後者は省略と空白に根拠がありますが、いずれも相手の真意や決定を確定できません。

模範解答（一六一字）

浅野は次に時計台で会うことを提案し、美佳も日時を決めようと返した。二人は、今日の食い違いを残しながらも、次は確かめ合って会う方向へ動いたと読める。ただし美佳は場所を繰り返さず、次の土曜の予定も空白だ。時計台へ行くと決めたとも、先月そこに約束があったとも言えない。申し出への応答は確かでも、具体的な約束はまだ成立していない。

別解例①（一六八字）

「時計のところで」と言う浅野に、美佳は日にちと時間を決めようと返した。以前のように曖昧なまま会うのではなく、確認できる約束を作ろうとする変化がある。一方、美佳が場所を言い直さず、予定表の次の土曜日も空白なので、すぐ再会を望んでいるとは言えない。場所を避けたい気持ちとも読めるが、本人にも答えは出ておらず、先月の合意の有無も未確定である。

別解例②（一六八字）

浅野の次の提案に美佳は返事をし、日付と時刻を決める必要を自分から言葉にした。今日の件を黙って終えるだけではなくなった、と読める。時計台をあえて書き足さなかったのは、同じ場所で待つ形をすぐ引き受けない慎重さかもしれない。ただし場所への拒否とは言い切れず、次の予定もまだ空白だ。今後の会い方も今日の約束の有無も、この場面だけでは定まらない。

答案で注意したい点 『時計台を覚えていたから先月の約束も確か』とは遡れません。逆に場所を繰り返さないことを別れの決意と決めるのも強すぎます。再会に向かう読みは実際の返答に強く支えられ、慎重さの読みは省略と空白に支えられますが、どちらも未来の確約ではありません。曖昧さ自体を善とせず、今回は日時を明確にするという発話の働きを捉えます。

☆**自己採点の観点** やり取りによって新しく生まれた合意への動きと、過去の事実・未来の場所に残る不確かさを、根拠の強弱を保って説明しましたか。

第七章 うまい説明と正しい説明

この章で身につける力 元の資料と説明文を照らし、省いてよい細部と、判断を変えてしまう条件を見分けて、短い案内を書き直します。

① 道を尋ねられたとき、目に入る店の名をすべて挙げる必要はない。相手が曲がる場所を見つけられるなら、途中の店をいくつか省いても着ける。だが、似た交差点が二つあるのに「次を右へ」とだけ言えば、言葉は短くても相手を迷わせる。

② 説明には、相手がたどれるように物事を選び、並べ直す働きがある。聞き手が知っている言葉に置き換えたり、初めに必要なところから話したりする。そうした工夫があれば、複雑な話にも入りやすい。ただ、聞いてすぐ分かることと、その説明どおりに動いてよいことは同じとは限らない。

③ たとえば、手続きの途中に「申し込みを受け取る」と「認める」の二つの段階があるとする。それを一つにして「申し込みば使える」と言えば、案内は滑らかになる。けれど、認められるための条件が別にあるなら、受け取った時点で使えると考えた人の行動は変わってしまう。省略がその人の判断を変えるところでは、短さだけを理由に段階を消せない。

④ 反対に、過去の利用者が三人いて、どの人が何時に申し込んだかまで案内に並べても、初めて使う人はかえって自分の場合を考えにくい。個々の記録が示す条件と結果の関係を取り出せば、記録を全部載せずに伝えられる。説明は資料を短く写したのではなく、何を確かめたい読者へ渡すかを考えて組み立てる文章なのである。

⑤ ここでは、「詳しい」と「正しい」を同じ意味にできない。細部を増やしても、期限を数え始める日を取り違えれば、返す日について誤った案内になる。反対に、条件を短く言い切った説明が、読む人に必要な区別をきちんと保つこともある。正確さは、残した情報の量だけでは測れない。

⑥ 説明を確かめるときには、元の資料の言葉と説明文の言葉が似ているかだけでなく、それぞれが何を指し、どの順で起こるのかを見たい。同じ「七日」という数字でも、申し込んだ日からののか、元の期限からなのかで届く日が違う。分かりやすい一文は、基点まで同じとは限らない。

⑦ うまい説明は、読む人がつまずかずに入れる道を作る。正しい説明は、その道で進める範囲を誤らせない。両方を満たすには、例の数や言葉の長さより、その説明を読んだ人が何を決めるかを確かめる必要がある。

資料一 川音図書室の貸出延長

以下は架空の川音図書室の決まりと、実際に画面へ出た三件の結果である。

決まり 返却期限当日までに申し込み、その本を以前に延長したことがなく、次の人の予約がない場合に限り、返却期限を元の期限から七日延ばす。どれか一つでも満たさなければ、期限は変わらない。

画面 貸出中の本の「延長を申し込む」を押すと、まず受付番号が出る。これは申込を受け取った印で、延長の決定ではない。期限、延長履歴、予約を確認した後、同じ画面に「延長済み」または「延長できません」の結果が出る。

記録甲 六月十日に申し込み。元の期限は六月十四日。初めての延長で次の予約はない。受付番号の後に「延長済み」と出て、新しい期限は六月二十一日となった。

記録乙 六月十日に申し込み。元の期限は六月十四日。初めての延長だが次の予約がある。受付番号の後に「延長できません」と出て、期限は六月十四日のままだった。

記録丙 六月十日に申し込み。元の期限は六月十四日。次の予約はないが、この本は一度延長している。受付番号の後に「延長できません」と出て、期限は六月十四日のままだった。

資料二 初めて使う人への揭示案内の下書き

読み終わらない本は、画面の延長ボタンを押してください。受付番号が出れば手続きは終わり、どの本も申し込んだ日から一週間、続けて借りられます。

設問

問一

資料一の三件と「受付番号」の意味について、正しいものを一つ選びなさい。

ア 乙は次の予約があるため受付番号が出ず、申し込んだ事実も記録されない。

イ 丙は次の予約がないため、二度目でも元の期限から七日延長される。

ウ 甲は番号に続いて「延長済み」と出たため、期限が六月二十一日となる。

エ 甲は「延長済み」と出たので、申込日から七日後の六月十七日が新しい期限となる。

解答 〔 〕

問二

資料一から短い揭示案内を作るとき、省いてよい細部と残すべき内容の判断として、最も適切なものを一つ選びなさい。

ア 三件の記録を一つずつ示さず、条件と画面で結果を確かめる方法を伝える。

イ 確認の段階を省き、受付番号が出れば延長が済んだと伝える。

ウ 過去の延長履歴を省き、期限と次の予約だけを条件として伝える。

エ 元の期限を省き、申込日から七日後が新しい期限だと伝える。

解答 〔 〕

解答・解説

本文の道筋 ①・②で、短く説明してよい細部と、落とすと道を誤る分かれ目を示します。③は手続きの段階を一つにする危うさ、④は個別の記録を条件と結果へ組み直す利点を述べます。⑤・⑥で七日を数える起点のような小さな違いが行動を変えると確かめ、⑦で説明のうまさと正確さを結びます。資料一の規則と三件の結果に照らし、資料二の案内を直します。

問一

正答 ウ

根拠と判断 資料一では三件とも番号が出ていますが、結果が『延長済み』なのは甲だけです。甲は期限内・初回・予約なしの三条件を満たし、元の六月十四日から七日延びて二十一日になります。

他の選択肢 アは乙にも番号が出た記録を落とします。イは丙がすでに一度延長している点を落とします。エは『延長済み』という結果は捉えています。七日の起点を申込日に変えていません。

問二

正答 ア

根拠と判断 資料の記録甲・乙・丙は条件と結果の関係を確かめる例です。初めて使う人向けの案内では個別の経過をすべて並べる必要はありませんが、どんなとき延長でき、何を見て確定とするかは残します。

他の選択肢 イは受付と決定の区別を、ウは初回という条件を消します。エは七日という数字を残しても、数え始める日を変えるので期限を誤らせません。

問三

設問の条件 三件が示す共通の条件と異なる結果を取り出し、初めて使う人に必要な一般的な説明へまとめます。記録を省くことと条件を消すことは分けます。

根拠から答案へ ④は個々の時刻や人を並べるより、条件と結果の関係を取り出すほうが読者の判断を助けると述べます。甲の成立と乙・丙の不成立から、期限内・初回・予約なしの三条件、および番号と結果表示の違いを示せます。

模範解答〔九〇字〕 甲・乙・丙は、条件がそろった場合と欠けた場合の違いを示す例である。初めて使う人には三件を並べるより、申込条件と番号の後に結果を確認する手順を示すほうが、自分の場合を判断できるから。

別解例①〔九〇字〕 三件の日時や経過を並べなくても、期限内・延長歴なし・予約なしで延長されるという関係は伝えられる。番号だけでは決まらず結果を確認することも示せば、利用者の判断に必要な情報は残るから。

別解例②〔八八字〕 甲は延長され、乙・丙は条件が欠けて延長されない。個別の記録を省いても、この条件と結果の分かれ方、受付番号と確定表示の違いを案内にまとめれば、利用者は自分の本で確かめられるから。

答案で注意したい点 『例は細かいから省く』だけでは、何を代わりに残すかがありません。また、三件の共通点を番号の発行だけにすると、延長できない二件との違いが消えます。

☆**自己採点の観点** 具体例を一般的な条件と結果へ組み直し、省いてもよい記録と残すべき区別をつなぎましたか。

問四

設問の条件 甲の申込日・元の期限・新しい期限を使い、六月十日を起点にする誤った説明と、六月十四日を起点にする決まりを比べます。返却日の判断に結びます。

根拠から答案へ 甲は六月十日に申し込み、元の期限は十四日です。下書きの起点なら十七日、資料一の決まりなら二十一日です。数字の『一週間』『七日』が合っていても、いつから数えるかを変えると案内が指す期限は変わります。

模範解答〔一〇八字〕 甲は六月十日に申し込んだが、元の期限は十四日だった。下書きのように申込日から一週間とすると十七日が期限になり、決まりどおり元の期限から七日延ばす二十一日と異なる。読む人は正しい返却日を早い日付として受け取ってしまう。

別解例①（一一三字）

「申し込んだ日から」は甲なら六月十日を起点にし、六月十七日までと読ませる。しかし実際には、六月十四日の元の期限から七日延び、二十一日が新しい期限である。七日という長さだけを残して基点を変えると、利用者が返すべき日を取り違える。

別解例②（一一〇字）

甲の申込日は六月十日、元の返却期限は十四日である。案内の一週間なら十七日までだが、資料の七日は十四日から数えるので二十一日までとなる。条件を満たして延長された人にも、同じ七日という語が違う期限を示し、返却予定を誤らせる。

答案で注意したい点 『どちらも七日なので同じ』では、起点の違いを見落としします。二十一日は甲が条件を満たして『延長済み』となった結果です。番号が出ただけの乙・丙にもこの日を当てはめてはいけません。

☆自己採点の観点 甲の十日・十四日・二十一日を混同せず、誤った十七日との違いが返却の判断に及ぶと書きましたか。

問五

設問の条件 利用者に向けた案内の形で、返却期限当日まで・初回・次の予約なしの三条件、番号は受付の印、結果の表示、元の期限から七日、不成立なら期限は変わらないことを一続きにします。

根拠から答案へ 資料二は短く呼びかける長所がありますが、番号を確定にし、条件を『どの本も』へ広げ、日数の起点を申込日に変えます。甲・乙・丙の数字を列挙せず、利用者が自分の本で確かめられる順序へ組み直します。

模範解答（一六一字）

本の延長は返却期限当日までに申し込みます。その本を以前に延長しておらず、次の人の予約がない場合に限り、元の返却期限から七日延びます。画面で「延長を申し込む」を押した後の受付番号は、申込を受け取った印です。続いて表示される「延長済み」を確かめてから新しい期限で返してください。「延長できません」と出た本の期限は変わりません。

別解例① 「一六六字」

読み終わらない本は、返却期限の日までに画面から延長を申し込んでください。延長できるのは、その本を以前に延長しておらず、次の人の予約がない場合です。受付番号が出て、まだ延長は決まっていません。結果が「延長済み」なら元の期限から七日後が新しい返却期限です。「延長できません」なら期限はそのままなので、画面の結果を必ず確認してください。

別解例② 「一六三字」

返却期限当日までなら、本の画面から延長を申し込めます。押した後に出る番号は受付のしるしで、確定の表示ではありません。以前にその本を延長しておらず、次の予約もないとき、「延長済み」と表示され、元の返却期限から七日延びます。「延長できません」と表示された場合は期限が変わりません。番号だけで返却日を決めず、結果画面を見てください。

答案で注意したい点 短くするために三件の記録を省くことはできますが、『どの本も』と広げたり、番号を確定と書いたりはできません。基点を落とすと、七日という数字が合っていない返却日がずれます。反対に、元の資料の全行を並べるだけでも初めて使う人には読みにくくなります。

☆**自己採点の観点** 三条件を満たすときだけ延長される流れ、番号から結果への順序、七日の基点、不成立時の期限を、掲示として使える言葉にまとめましたか。

第八章 残るものと消えるもの

この章で身につける力 長い文章の離れた箇所を結び、記録に残る形と現場で続く働き、それぞれについて確かめられることと確かめられないことを整理して、筆者の主張を組み立てます。

① 取り壊しが決まった古い公民館の倉庫から、人形劇の台本が出てきた。町の劇団が長く演じていた『赤い扉』の台本である。角はすり切れていたが、登場人物のせりふは読めた。最後の場面、主人公が「扉を開けてもいい？」と尋ねるところには、鉛筆で「問いのあと、三つ数える」と書き添えてあった。

② 台本が残ったので、少なくともその時期の上演で、問いのあとに間を置こうと考えた人がいたと分かる。しかし三つの数え方も、客席の様子も、紙にはない。上演中の写真も一枚見つかった。扉の前に人形が立ち、客席の子どもたちがこちらを向いている。写真の端には、手を重ねている子もいる。けれど、それが返事を待つ場面なのかも、子どもたちが何を言ったかも、一枚からは分からない。

③ 当時、人形を動かしていた人は、こんなふうに話した。「『いいよ』という声が出ると、扉を開けた。声が小さい日は、もう少し待ったこともある」。話す人はそこで少し黙り、客席の方を見るように目を上げた。

④ この話を台本の短い指示に重ねると、三つ数えることは動きをそろえるためだけでなく、客席の返事を舞台へ迎え入れる方法でもあったように見える。ただし、この人が覚えている一回一回と、劇団が実際に行ったすべての上演は同じではない。返事を待った日も、時間の都合で待てなかった日もあったかもしれない。本人の話を疑って退ける必要はないが、その話だけで、書き込みをした人の意図や、劇団全員の考えが一つだったと決めることもできない。

⑤ 数年後、別の場所でこの劇を再び演じるようになった。新しい劇団は残された台本を読み、かつての出演者にも話を聞いた。初めの稽古では、書き込みどおり「一、二、三」と数えて扉を開けた。ところが、駅前広場では車の音に客席の声が紛れ、その間に返事があったかどうか、舞台から分からなかった。見ている人の多くは、たまたま足を止めたところだった。

⑥ そこで役者は、問いかけたあと人形の手を上げて見せ、客席にも手を上げてもらうことにした。最初に数えた三拍が過ぎても、人形はすぐには扉を開けない。手が上がったのを見てから、扉へ進む。ある日の上演では、前の列の子がためらい、後ろの列の手が先に上がった。役者は少し待って、前の列からも手が上がったところで扉を開けた。

⑦ 広場で紙に書かれた三拍をそのまま守ったときは、返事を受けとめられなかった。一方、手を上げる方法では、客席の反応が扉を開ける時を決めている。形が変わっても、客席とのやりとりという働きが続く可能性は、ここに見いだせる。

⑧ もっとも、新しい上演で客が手を上げたからといって、昔の客も同じ気持ちで声を出したとは言えない。声を発することと手を上げることでは、客席に求められることも違う。小さな公民館の中で一人が言った「いいよ」と、駅前で何人もの手が上がることで、周りの人の目も違っただろう。新しい劇団が古い台本を読み、出演者の話を聞いたという経緯は、試みのつながりを示す。それでも、過去の体験が新しい広場にそっくり移ったという証明にはならない。

⑨ 台本の書き込みがなければ、三拍を試し、広場ではなぜ別の合図が要するかを問う出発点も失われただろう。記録は上演そのものではなく、形がどう変わったかをたどる手がかりとなる。

⑩ その記録も、残し方によって姿を変える。公民館の整理では、上演用の台本はまとめて保存されたが、稽古のたびに机に置かれた小さな札は捨てられた。何を残すかを決めた人の選択も、今読めるものを形づくっている。札に何が書かれていたかは分からない。もし返事を待つ長さをその日ごとに記した札があったなら、上演の違いを知る手がかりになっただろう。だからといって、実際にそういう札があったと書き足してよいわけでもない。

⑪ 残った台本だけを読む人には、劇が毎回同じ三拍で進んだように思えるかもしれない。逆に、出演者の語る声の記憶だけを聞く人には、いつも客席の返事を待っていたように思えるかもしれない。どちらも過去の一部分に触れているが、そこから全体の様子まで言い切ると、残らなかったものの場所を想像で埋めることになる。

⑫ 人が出来事を語るときにも、何を話し、何を省くかが働く。歓声は話に残りやすく、返事がなくて困った日の静けさは語られないかもしれない。そういう日が実際にあったとは断定できないが、鮮やかな語りだけで過去の全体を決めることにも慎重でありたい。

⑬ 記録から落ちたものがあると知ると、「忘れるから新しくできる」と言いたくなる。たしかに、三拍だけを唯一の決まりと考えなかったから、広場で手を上げる方法を試せた。しかし稽古の札を失ったこと自体が新しい方法を生んだわけではない。その札には、今なら役立つ工夫が書かれていた可能性もある。失われたものの価値まで、後から一つに決めることはできない。

⑭ この劇を「受け継いだ」と言うなら、古い台本を読み、客席の反応を確かめながら上演を変えた筋道を示したい。同時に、昔の上演の全体や札の内容は分らないと付け加える。手が上がった事実だけから働きの連続を決めず、その手を見て役者がどう動いたかまで確かめるのである。

⑮ 残るものを集めれば過去が完成するわけではなく、形を変えれば必ず何かが続くわけでもない。古い指示がどこまで語り、今の行為が何を示し、その間にどんな空白があるかを分けて考える。そのうえで、確かな手がかりをつなぎ、届かない部分を残したまま、何を受け継いだと言えるのかを問い直すことができる。

設問

問一

台本の書き込みと、かつての出演者の話から読み取れることとして、最も適切なものを一つ選びなさい。

ア 書き込みと出演者の話が重なるので、三拍は返事を待ったための指示で、全上演で守られたと分かる。

イ 書き込みは間を置く指示を示し、出演者の話は客席の返事を迎える働きも考える手がかりになる。

ウ 出演者が三拍より長く待った日も語るので、書き込みは実際の上演を考える手がかりにならない。

エ 写真に子どもがこちらを向く姿があるので、三拍の間に返事をした上演があったと確認できる。

解答 〔 〕

問二

捨てられた稽古の札と、出演者の語りについて、本文の考えに合うものを一つ選びなさい。

ア 札の内容が失われても、台本に残る三拍はどの上演でも守られた共通の決まりだったとみなせる。

イ 出演者が返事を待った話を覚えているので、語られない日には誰も返事をしなかったと考えられる。

ウ 札に何が書かれたかは不明だが、欠けた記録や語りの選択によって過去の見え方が偏り得る。

エ 札の内容を推測で補えないため、台本を残して札を捨てた選択が今の読み方に関わったとも言えない。

解答 〔 〕

問三

古い台本の「問いのあと、三つ数える」という書き込みだけでは、昔の上演で客席の返事をどう扱ったか決められないのはなぜですか。本文第二～第四段落を踏まえ、六〇～九〇字で説明しなさい。

解答欄 六〇～九〇字

[illegible]メ
モ

必要に応じて、根拠となる箇所や答案の順序を書き留めましょう。

解答・解説

本文の道筋 ①・②は台本と写真が残す手がかりと空白を示し、③・④で出演者の記憶を重ねつつ範囲を限ります。⑤～⑧は三拍と手の合図を、客席の反応が舞台に関わるかという観点で比べます。⑨は古い記録の効用、⑩～⑬は札の欠落や語りの選択を扱い、失われたものの内容も価値も決めつけません。⑭・⑮は資料と現在の行為を結び、分からない過去を残したまま継承を判断します。

問一

正答 イ

根拠と判断 ②の台本から確認できるのは問いのあとの間です。③の出演者の話を重ねると、返事を待つ働きも考えられます。④は一人の記憶から全上演や全員の意図へ広げることを控えます。

他の選択肢 アは働きの候補を唯一の目的とし、全上演にも広がります。ウは待つ長さの違いを理由に書き込みを無効にします。エは写真からは確かめられない返事を読み込みます。

問二

正答 ウ

根拠と判断 ⑩は札の内容を推測として区切り、⑪・⑫は台本と語りのそれぞれが過去の一部を伝えること、片方から全体を断定できないことを示します。⑬は札の喪失を新しい方法の原因としません。

他の選択肢 アは台本の指示を全上演の事実へ広げます。イは語られない日の内容を、記憶にないことだけで決めます。エは札の中身が不明なことから、残し方の選択が見えないことを混同します。

問三

設問の条件 書き込みが確かめさせる間の指示と、そこからは分からない客席の反応や上演ごとの差を結びます。出演者の話は手がかりとなっても、全上演の証明にはならない点を押さえます。

根拠から答案へ ②には三拍の数え方も客席の様子もなく、③の話を加えると返事を待つ働きが考えられます。一方④は一人の記憶を劇団全体の各回へ広げられないと述べます。

模範解答 (八四字) 書き込みが示すのは問いの後に間を置く指示までで、客席の声や実際の待ち方は記されていない。出演者の話は手がかりになるが、それだけで全ての上演が同じだったとは言えないから。

別解例① (八二字) 台本から間を置く考えは分かっても、返事があったか、その日ごとにどれほど待ったかは分からない。一人の出演者の記憶を重ねても、劇団の上演全体の様子まで確定できないから。

別解例② (八五字) 三拍は紙に残った動きの指示であり、声を待つ働きや客席の反応そのものではない。出演者の証言を合わせれば考える手がかりは増すが、毎回の実際を一律に決める証拠にはならないから。

答案で注意したい点 『台本では分からない』だけでは、台本から分かることまで消します。写真に子どもが写っていても声は分かりません。証言を無視せず、その届く範囲を示します。

☆自己採点の観点 書き込みが示す間、返事を扱う実際、一人の記憶の限界を区別して説明しましたか。

問四

設問の条件 広場で声を捉えにくくなった事情、反応を舞台の進行に生かす可能性、声と手および過去と現在の違いを、因果と留保を付けて述べます。

根拠から答案へ ⑤の広場では三拍を守るだけでは声が届いたか分かりません。⑥は手を見て開ける具体的な行為、⑦は共通する働きの可能性、⑧は両時代の客席の体験を同じと断定できない限界を示します。

模範解答 (九九字)

広場では三拍の間に客席の声を確かめられず、新しい劇団は手が上がるのを見てから扉を開けた。反応を上演に生かす働きは続き得るが、声を出すのと手を上げるのでは体験が違い、昔の客席も同じだったとは言えない。

別解例① (一〇九字)

古い台本の三拍を駅前で守っても返事は聞き取れなかった。そこで手を上げてもらい、その反応を見て舞台を進めた点に、昔の返事を迎える働きとのつながりがある。ただし方法も客席の経験も異なり、過去をそのまま再現したわけではない。

別解例② (一〇九字)

三拍を数えるだけでは広場の声を捉えられないため、役者は手の上がるのを待って扉を開ける。客席の反応で進行を決める点は昔の語りと通じるが、声と手は同じではない。一人の記憶から昔の上演全体まで同じ働きだったと断定もできない。

答案で注意したい点

『方法は違っても同じ伝統が残った』だけでは、観察された役者の行為と、昔の体験を同じと見せない理由がありません。三拍を試したこと自体が無意味だったと書くのも、記録の役割を落とします。

☆自己採点の観点 変えた事情と具体的行為を挙げ、続く可能性のある働くと、過去について言い切れない部分を分けましたか。

問五

設問の条件 少なくとも二つの離れた論点を選び、資料に残る事実、今の上演で見える行為、その間をつなぐ経緯を関連づけます。失われた部分を想像で確定しない留保まで含め、一続きの主張にします。

根拠から答案へ

①～④で台本と証言の届く範囲、⑤～⑧で三拍から手の合図への変化とつながり、⑨～⑬で記録を残す効用と札の欠落、⑭・⑮で受け継ぐと言える根拠と限界を整理します。答案はすべてを列挙するより、選んだ論点の関係を確かな根拠で組み立てます。

模範解答 (一九四字)

古い台本の三拍という指示は、昔の上演全体を再現しないが、新しい劇団が変化を考える出発点となった。広場では声が届きにくく、客席の手を見て扉を開け、反応を舞台に生かした。台本を読み出演者の話を聞いた経緯と現在の行為から、働きのつながりは考えられる。ただし、声と手で体験は異なり、失われた札の内容も不明である。何が続いたかを示し、過去全体を再現したと言い切らないことが、継承の判断には要る。

別解例①〔二〇〇字〕

台本は問いのあとに間を置く指示を伝え、後の劇団が三拍を試して、広場で方法を変えた経緯もたどらせる。客席の手を見て扉を開ける行為には、昔の出演者が語った返事を迎える働きとのつながりが見える。一方、証言は全上演の記録ではなく、捨てられた稽古の札に何があったかも分からない。だから形の一致だけで継承を決めず、記録と今の行為を照らし、確かめられない過去を埋めずに、どの働きがどんな形で続いたかを述べるべきだ。

別解例②〔一九九字〕

三拍を記した台本が残ったことで、劇の痕跡と新しい上演の変更点を比べられる。駅前で三拍だけを守っても客席の声は捉えられなかったが、手が上がるまで扉を開けない方法なら反応が進行に関わる。ここには働きが続く可能性がある。ただし出演者の記憶は過去の一部で、捨てられた札の中身も分ならず、昔と今の客席の体験も同じではない。残った指示を根拠に変化を追い、欠けた部分を認めながら、受け継いだと言える範囲を考える。

答案で注意したい点

『保存も変化も大切』という並記では、何が残り何が変わり、どこを根拠に働きの連続を考えるかが分かりません。なくなった札の内容を實在の事実として補ったり、新旧の客席の経験を同一視したりしないでください。複数の筋道で満点に達します。

☆自己採点の観点 離れた箇所の事実を因果や根拠で結び、継承の判断とその限界まで、自分の筋道で再構成しましたか。

あとがき

八つの章では、待つ判断、比べる観点、人物の変化、型の働き、立場と制約、やり取りの順序、説明の省略、残る記録をそれぞれ扱いました。使う手がかりは章ごとに違います。新しい文章に向かうときも、まず何を確かめたいかに合わせ、読む場所や比べ方を選んでみてください。

読み終えても残る問いを、そのままに置いてよい場合があります。本文から確かめられるところを示し、まだ分からないところを区別しましょう。異なる答案に出会ったら、何を根拠に、どこまで述べているかから比べてみてください。

奥付

書名 現代文問題集第八冊 読み方を選び、文章全体を捉える

役割 発展・総合読解

発行 和会塾

版 改訂統合版

発行日 二〇二六年九月二十七日

本文・物語・事例・資料・設問は本教材のために制作したものです。学習用の架空資料は、該当箇所での旨を記しています。